

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第182次)

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、回廊で囲まれた東西約120m、南北約170mの区画です。大極殿院の中央には、儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、その南側には^{れきじき}礫敷広場を隔てて大極殿院南門が位置していました。奈良文化財研究所では、2014年度より大極殿院内庭部の発掘調査に着手しました。今回の調査は大極殿前面の広場を対象として、4月1日から開始し、12月半ばに終了しました。調査区は東西52mで、西側約30m分を西区、東側約22m分を東区としました。

調査の結果、古墳時代から平安時代までの遺構を確認し、藤原宮造営以前から宮廃絶後までの遺構変遷がはっきりとわかりました。

藤原宮期の遺構として、内庭広場を検出しました。東区と西区の東半分では、大極殿院の南に位置する朝堂院地区の広場と同じく、拳大の礫が残っており、その厚さは3～5cmです。礫敷の上面には、南北で約0.3mの高低差があり、南側のほうが高いことがわかりました。

藤原宮造営期の遺構には、運河、南北溝3条、東西溝1条があります。このうち、西区の中央部を南北に貫く運河は一部を検出したのみですが、幅約7mで、深さは0.7m以上です。埋土上部は褐色土と黄色土とを交互に重ねており、丁寧に埋め立てています。東区では南北溝を1条確認しました。この南北溝は調査区の北側へと延びており、大極殿院南門の造営に際し、南門を避けて東へと運河を迂回させた溝とみられます。

東区南端では東西溝、西区の中央部では南北溝を検出し、ともに最大幅2.0mで、埋土からは木片、獣骨のほか土器が出土しています。周辺での調査成果から、前者は先行四条大路の北側溝に、後者は先

行朱雀大路の東側溝にあたるとみられます。また、この南北溝のすぐ西側で、もう1条南北溝を確認しました。幅は約2.5mと大きく、北へ延びています。

宮廃絶後の遺構は、主に西区で見つかりました。西区西南部で検出した3基の柱穴は2.1m(7.0尺)間隔で並び、第148次調査で検出した奈良時代の掘立柱建物の北側柱列にあたります。これにより、この建物が桁行6間・梁行2間の東西棟建物であることが確定しました。西区西北部で検出した掘立柱建物は、東西、南北ともに2間以上で、調査区外に続いています。西区中央の北寄りでは検出した掘立柱建物は、東西2間で西側に底が付き、南北は3間以上で北側へ延びています。柱穴からは黒色土器が出土し、平安時代に降る建物と判明しました。

また、西区の中央部では奈良時代中頃と平安時代の埋納遺構を各1基検出しています。奈良時代のものは和同開珎5枚を納めた須恵器杯を正位で埋納した遺構で、平安時代のものは土師器小皿を重ねて納め、土師器土釜で覆っていました。掘立柱建物との関係ははっきりとはありませんが、いずれも敷地の地鎮に関わる可能性があります。

このほか、西区の西寄りでは古墳周溝とみられる円弧状の溝を検出しました。溝の埋土からは埴輪・須恵器等が出土し、周囲では管玉や耳環も出土しています。削平された古墳は直径約12～15mの円墳と推定できますが、東半分は藤原宮造営期の2条の南北溝によって壊されています。

藤原宮の周辺では、朱雀大路や周辺の造成にともない改葬したとみられる日高山横穴や、日高山1号墳等があり、藤原宮朝堂院地区では古墳の周溝も見つかっています。今回の調査で発見した古墳とあわせ、宮造営以前の景観を考える上で重要な手がかりとなります。(都城発掘調査部 森川 実)



調査区全景(南から)



古墳周溝と南北溝(北西から)